

招聘研究員

氏名	梁 珊珊 (LIANG Shanshan)
所属機関等	華東師範大学 对外漢語学院 中国非物質文化遺産保護研究中心
受入期間	2017年10月11日～2017年10月31日
指導教員	小熊 誠 (チューター: 兪鳴奇)
研究課題	中日伝統文化比較研究 二宮尊徳の民俗文化研究



二宮尊徳に関する民俗文化研究についての三つの私論

梁 珊珊

I 二宮尊徳という人物のイメージはどのように形成されたのか

(1) 二宮尊徳の生涯

二宮尊徳(通称は二宮金次郎)は、1787年9月4日(天明7年7月23日)、東栢山村に生まれた。1791年、尊徳が5歳の時、酒匂川の氾濫で一家の田畑は流され、荒地となってしまった。その後、両親は相次いで病気で亡くなり、尊徳は伯父の家に身を寄せることとなった。家は貧乏だったが、尊徳は一生懸命努力し24歳の時には自らの稼ぎでもととの自宅と土地を買い戻し、一家を再興した。

26歳の時に小田原藩士服部家に請われて働き始め、5年後には服部家を再興した。

1822年、小田原藩主大久保忠真侯の依頼により下野国桜町領の経済再建を担い、10年後には桜町は大きく変貌を遂げることとなった。この桜町領経済再建の成功により、尊徳は幕府直属の官吏として重宝されるようになり、農村復興事業に携わった。1856年に亡くなるまでに、直接経済再建を指導した藩・郡・村は、610を超えた。

(2) 二宮尊徳の影響

二宮尊徳は桜町の農村改革と再建に成功したことで、その名が知れ渡りようになった。明治維新後、教育は庶民の間にも普及していき、二宮尊徳の故郷小田原では平民階級から自身の懸命な努力により名を成した人々がいた。彼らは故郷の教育への感謝を表すために、小学校へ二宮金次郎像を鑄造し始めた。今から90年前には、二

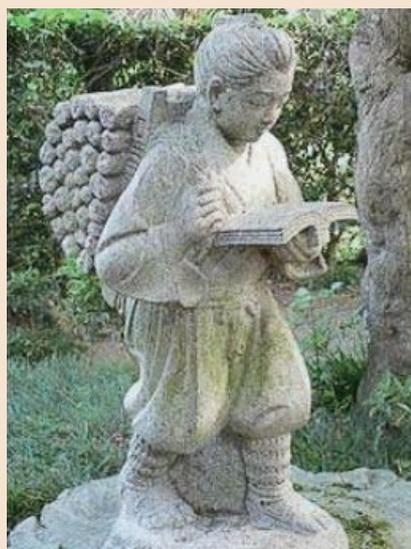
宮金次郎像は小田原の学校から全国へと普及していった。

(3) 二宮金次郎像の伝えるメッセージ

典型的な二宮金次郎像の、薪を背負いながら本を読む姿から、少なくとも当時の民衆に以下のような内容を伝えたことが見て取れる。その負薪読書のイメージは、以下のメッセージを伝えたと考えられる。

①教育と勉強の重要性

明治維新以降、日本においては社会的階層が撤廃された。各地に小学校が設置され、多くの普通の子どもたち



小学校にある二宮金次郎像





尊徳祭での太鼓の演奏 小田原市尊徳記念館



相模人形芝居の様子 小田原市尊徳記念館

も教育を受ける機会を与えられた。この条件のもとで、いかにして民衆の教育に対する思いを奮い立たせ、民衆に教育の重要性を知らしめたのか？ 二宮尊徳は間違いなく民衆のモデルとなったのである。故に二宮金次郎像は小学校で教育を受ける学生たちにとっても勤勉さのシンボルとなったのだ。

②積小為大

二宮金次郎像にはもう一つ特徴がある。薪を背負いながら勉強しているということだ。貧しく心もとない家庭環境にある二宮像を建てたことは、当時小学校で学習する人々のほとんどの家庭が決して豊かではなく、彼らは肉体労働をしながら懸命に勉強することで学業を成就したことを意味している。これは正に二宮像が人々に直観的に伝えた理念、勤労と節約というもう一つの理念である。この理念は二宮尊徳の思想体系において“積小為大”と称されている。

③修身と報国

二宮金次郎の銅像が手にしているのは中国の「大学」という書であり、開かれているページには次の文が書かれている。「一家仁 一國興仁 一家讓 一國興讓 一人貪戾 一國作亂 其機如此」(「一家仁なれば一國仁に興り、一家讓なれば一國讓に興り、一人貪戾なれば一國乱を作す。その機かくのごとし」。意味は、「一人一人が慈しみ思いやる心を持てばみんながこの心になり、一人一人が驕らぬ謙虚な心を持てば皆がその心になる。一人一人が身勝手なことをすればみんなが混乱し争いごとになる。国を治める機会とはこのようなものなのである」である)

この言葉から、明治維新以降、日本の政府は個人の努力を認めていたことが見て取れる。学校教育の面では、政府は自身の努力と国家発展との連携によって人々の愛国心と社会的責任感を奮い立たせることを望んでいたの

だ。

II 文化財としての二宮尊徳文化の保護

尊徳の生誕地である小田原市では、今に至るまでずっと年に一度の尊徳祭が行われている。以下、筆者が2017年10月15日に訪れた尊徳祭を例にして、文化財としての二宮尊徳文化保護が我々に与える示唆を考えてみる。

(1) 伝統的な祭りと現代的学校教育の一体化

尊徳祭の儀式は小田原市教育委員会が主催し、桜井地区自治会連合会が協力して行われる。場所は二宮尊徳が生前居住した場所と現在の小田原市尊徳記念館である。上記のとおり主催者が小田原市教育委員会なので、最初から地元の小学校の児童教育と一体化している。10月14日の活動項目の中では、市内の小学5・6年生が参加した、二宮金次郎に関する作文の発表会が開催された。また、一般社団法人代表 木下齊氏と報徳二宮神社宮司 草山明久氏による公開講座「二宮金次郎に学ぶ地方創生～現代に通用する尊徳翁の事績～」が行われた。当日農産物売り場では、小田原報徳実践会の主催した「報徳楽校」の子どもたちが栽培した米や野菜類が販売された。

(2) 祭りと地方文化の伝統との一体化

小田原市教育委員会が主催する尊徳祭は総合的な文化イベントである。10月14～15日の尊徳祭の期間、尊徳記念館とその付近では以下のイベントが行われた。①尊徳生家いろり燻蒸実演 ②神奈川県指定重要文化財「二宮尊徳生家」特別公開 ③尊徳記念館展示室無料開放 ④二宮尊徳学習事業の成果展示 ⑤ポスターの原画展示 ⑥水墨画展。これらの文化活動の多くは、小田原市の伝統的地方文化といえる内容を多く伝承している。



例えば、尊徳祭の農産物売場では栢山の農産物と尊徳に関するおやつが売られているが、これを売っているのは、地元農家の人々である。15日午前の太鼓や琴の演奏者も地元ボランティアである。尊徳祭のイベントは地元の方々に発表の舞台と機会を提供している。

10月15日午後の民話語りの活動は二宮尊徳の物語に基づいており、その内容は二宮尊徳個人の物語にとどまらず、栢山地域の伝統文化についても言及したものであった。栢山田植歌保存会は田植歌を歌ったが、これも栢山地区の農家が自発的にまとめ、田の土ならしから稲の収穫に至る稲作の様を観客に向け生き活きと表現していた。相模人形芝居は日本の国指定の無形民俗文化財であり、これらの出し物は多くの来場者を引きつけていた。

(3) 有形の文化財と民俗芸能保護の一体化

上演活動の場としての尊徳祭は、いくつかの地元民俗芸能が一体となったものだ。それと同時に、尊徳記念館・尊徳旧居、そして神社の建立と保護が行われていることは、我々に文化財保護のもう一つの視野を広げてくれる。現在尊徳記念館は展示室、会議室などを備えた、総合的な文化センターとなっている。

小田原市の文化財である二宮尊徳生家の家屋はできる限り本来の材料が用いられている。元の状態を復元した木造の梁、囲炉裏、竹や木でできた壁、茅葺きの屋根は、二宮尊徳が生きていた当時の生活状況を最大限に復元するだけでなく、日本の伝統においては物がその役目を十分発揮し、自然のままに生かされるという生活理念を人々に伝えている。生家の建物の隣には二つの記念碑がある。一つには二宮尊徳の報徳記の思想が刻まれ、もう一つにはこの旧宅はどのように個人の住宅から公共文化財になったかということが記されている。このことから、日本では文化遺産を保存するには文化財本来の価値に注目するだけでなく、文化財の保護者も銘記されることが分かった。

III 時代変化による二宮尊徳の物語の変遷

第二次世界大戦終結後、日本全体の文化思潮が帝国主義から平和主義へと移っていく。二宮金次郎像が強調した、国のために身をささげる精神も新しい考え方の人々から批判された。1960年代、日本の高等教育の知識人たちからなる日本教職員組合が二宮金次郎像を撤去させる運動を展開した。以来、二宮尊徳の物語は学校で語られることがほとんどなくなった。

それと同時に戦後の日本では、仕事に励む社会思潮が起こり、この考えのもと、日本は高度発展期に突入した。懸命の努力で豊かになった人々は二宮尊徳の勤勉な

イメージの記憶から再び小学校の中に二宮金次郎像を建て始めた。二宮金次郎像は再び小学校に建てられるようになったが、二宮尊徳の物語は大きく変わっていった。1985年以来、常光徹先生は自分自身が中学校の現場で聞きとった話を整理し、民俗学の研究著作「学校の怪談 一口承文芸の展開と諸相」をまとめた。その中に以下のような二宮金次郎像に関する怪談がある。

「夜中の十二時になると金次郎像が手に持っている本がめくられ、毎晩ページが変わる」「背負っている薪の数も日によって違っている」「夜中の二時になると金次郎は学校の階段などを動き回る」。

この本が1993年に出版された後、児童向け絵本の編集者と映画監督がそれを気に入り、常光先生が提供した題材を整理し七つの怪談話をまとめた。その後相次いで多くの絵本、映画が制作され、当時の学生の間でブームになった。

二宮金次郎像の怪談がなぜ学校で流行ったのだろうか。常光徹先生がこの本の中で言及している。怪談は日本の社会では昔から流行してきた。ただ、日本の社会の急激な発展に伴って怪談の流行する文化空間が変わったということなのだ。もともと田舎の人々の間で流行っていた怪談が、今になって若者が集まる学校や大人が住む都市にやってきたのである。

怪談の起こる時間や場所は変わったが、怪談の種類や思想は変わらず伝統的なものである。二宮金次郎像を含めた多くの学校の怪談は、日本の民衆の間に伝統的なアニミズム思想が存在することの表れであろう。

現在、日本社会は皆豊かになり、教育が重視されるようになったことによって、小学校の二宮金次郎の像に対しては新しい見方が出てきている。2016年、日本のあるウェブサイトには以下のニュースが載っていた。

南原小学校に金次郎の座像を寄贈した地元団体「報徳道研修 いまいち一円会」はJ-CASTニュースの取材に、「歩きスマホの危険性などが問題視される中、学校でも生徒に『ながら行動』をしないように指導していると聞きます。こうした時流を考え、本を読みながら歩く金次郎の像よりも、座像の方が適切だと考えました」。その上で、「たとえ座っていたとしても、金次郎の勤労・勤勉の精神は生徒に伝わると思います」とも続けた。

また、同会が「金次郎像の姿を子どもが真似したら危険だ」との指摘を直接受けたことはないというが、以前からこうした意見を耳にすることはあったようだ。確かに、ニュースサイト「毎日.jp」が12年1月に配信した記事によると、保護者から「(金次郎像のように)歩いて本を読むのは危険」という意見が滋賀県大津市の教育委員会に寄せられたという(J-CASTニュース 2016



年3月2日付)。

「薪を背負いながら本を読んで歩く金次郎像」から「座って本を読む金次郎像」へと移っていく現象から、社会経済がより豊かな「成熟期」の状態にある現代において、日本人がよりリラックスして健康に着目するよう

になったということが読み取れた。

【参考文献】

- 1) 常光徹 1993『学校の怪談一口承文芸の展開と諸相』ミネルヴァ書房
- 2) 『J-CAST ニュース』(2016年3月2日付) <https://www.j-cast.com/2016/03/02260188.html?p=all>

二宮尊徳民俗文化研究的三点思考

華東師範大学 梁 珊珊

一. 二宮尊徳形象是如何构建起来的

(一) 二宮尊徳生平

二宮尊徳通称二宮金次郎。1787年7月23日出生于东栢山村。1791年，二宮五岁，酒匂川大洪水使他们家的农田变成了荒地。此后，二宮的父母相继病故，他被寄养于伯父家中。虽然家境贫困，但他非常努力。24岁，二宮终于以自己的劳动所得购回了家中原有的住宅和土地，实现了家族重振。

26岁时，金次郎开始应邀到小田原藩 长老 服部家服务，5年后使服部家复兴。1822年，金次郎接受小田原藩主 大久保忠真 的委任，负责下野国 樱町领 的经济重建。十年后，樱町的面貌大大改观。樱町领经济重建的成功，使金次郎被重用为幕府直属官员，从事农村经济重建工作。至 1856年去世，金次郎直接指导经济重建的藩、郡、村多达 610 余处。

(二) 二宮尊徳的影响

二宮金次郎在樱町农村改革和重建的成功，使其名声大振。明治维新后，教育开始在日本平民之中普及开来。在二宮尊徳的故乡小田原，少平民阶层得以通过自己的努力工作而成名。昭和年间，这批人为了感恩故乡的教育，开始在小学校铸造二宮尊徳像。在距今 90 年之前，二宮尊徳铜像从小田原的学校普及到全国。

(三) 二宮尊徳塑像传达的内容

从二宮尊徳的标志性铜像：背着柴担看书的形象中，我们至少可以看出它向当时日本民众传达着以下内容：

1. 读书学习的重要性

明治维新之后，日本社会的社会分层被打破，各地小学校的建立使许多平民也有了接受教育的机会。在这一的条件下，如何唤起民众读书学习的热情，让民众认识到读书的重要性？二宮尊徳无疑成为民众的榜样。因此，二宮尊徳像对于在小学校接受教育的学生来说，是一种努力学习

的标志。

2. 积小成大

二宮尊徳铜像还有另一特征：学习的同时背着柴担。树立自小家境贫寒的二宮像，说明当时在小学校念书的民众普遍家境并不富裕，需要通过一边劳作、一边攻读的方式完成学业。这也正是二宮尊徳铜像向民众直观传达的另一理念：勤劳和节俭。这一理念在二宮尊徳思想体系中，被称为“积小成大”。

3. 修身与报国

二宮尊徳铜像手中的书册是来自中国的《大学》，并被翻到了这一篇上：一家仁，一国兴仁；一家让，一国兴让。一人贪戾，一国作乱。通过这句话，我们可以看到明治维新后，日本国对于个人努力的肯定。在学校教育上，也希望将自身努力与国家新盛联系起来的方式，激发民众的爱国情怀和社会责任感。

二. 作为文化财的二宮尊徳文化保护

在二宮尊徳诞生地小田原市，如今依然延续着一年一度的二宮尊徳祭。以下，笔者以 2017 年 10 月 15 日所看到的二宮尊徳祭为例，谈谈作为文化财的二宮尊徳文化保护给我们的启示。

(一) 传统祭祀与现代学校教育相结合

尊徳祭祀仪式由小田原市教育委员会主办，樱井地区自治联合会协助，祭祀地点设在二宮尊徳生前居住过的地方、现在的小田原市尊徳纪念馆。

由于活动是由小田原市教育委员会主办的，因此其一开始便与当地小学校的儿童教育结合在一起。在 10 月 14 日的各项活动中，既有关于二宮金次郎的作文发表会，参与者为市内 5-6 年级的小学校学生；又有一般社团法人代表 木下齐氏 和报徳二宮神社宫司 草山明久氏 在报徳社带来的公开讲座《二宮尊徳值得学习的地方——现在通用的尊徳翁事迹》。当天的农展品售卖摊位，出售小田原报徳



实践会主办的报德学校的孩子们种植的米和蔬菜。

（二）祭祀仪式与地方文化传统相结合

由小田原市教育委员会主办的尊德祭是一种综合性的文化展演活动。在10月14-15日尊德祭举办期间，尊德纪念馆及附近还举办如下重要活动：1. 尊德生家燃烟表演；2. 县指定重要文化财：二宫尊德生家特别公开；3. 尊德纪念馆展示厅免费开放；4. 二宫尊德学业成果展；5. 尊德祭海报原画展示；6 水墨画展。在这些公共文化活动中，其实承载了不少属于小田原市地方文化传统的内容。

比如，尊德祭中的农展品售卖摊位出售的柏山农产物和关于尊德的零食。售卖者均是来自附近的农民。15日上午的鼓乐表演、日本琴演奏者，也是来自当地的志愿者。尊德祭的活动为当地民众提供了一个展示的空间和契机。

10月15日下午的民间故事讲述活动基于二宫尊德的故事，而不局限于他的故事，而是关涉柏山地区的整个文化传统。柏山田植各保存会的田歌演唱也系柏山地区的农民自发组织，生动地为大家展演了当地种田插秧的情景。相模人形偶表演剧本身系日本的国家级无形文化财，两者结合，吸引了不少观众。

（三）物质文化财与民俗艺能保护相结合

作为展演活动的尊德祭，实则是几种不

同的地方民俗艺能的结合。同时，尊德纪念馆、尊德故居和神社的建立和保护，又为我们打开了文化财保护另一方面的视野。现在的尊德纪念馆作为一个综合性公共文化中心，设有报告厅、展示厅等多个区域。

在小田原市的文化财——二宫尊德出生地中，房屋尽可能地保持了原来的用料。原生态的木制房梁、篝火塘、竹木篱墙、茅草屋顶，不仅最大程度地还原了二宫尊德生前的日常生活情境，而且也向民众传达着传统日本物尽其用、顺应自然的生活理念。房屋外有两块纪念碑，一块纪念碑上刻着二宫报德记的思想，另一块纪念碑则刻写着这栋老宅怎样从私人住宅变为公共文化财的过程。可见在日本的文化财保护过程中，不仅注重文化财本身的价值，同时也铭记着文化财的保护者。

三. 二宫尊德叙事的时代变迁

第二次世界大战结束后，日本整体的文化思潮从帝国主义转变为了平和主义。二宫尊德铜像强调的为国献身精神也受到了新型分子的批评。1960年代，日本高校知识分子构成的日本教职员组合主导了一次的毁掉二宫尊德塑像的运动。此后，关于二宫尊德的故事在学校中变得不再流行。

于此同时，战后的日本又出现了努力工作的社会思潮。在这一思潮的带动下，日本经济进入了高速增长时期。部

分通过努力工作富裕起来的人对于二宫尊德勤勉形象的记忆，又促使他们到小学校里再次塑起二宫尊德像。

小学校门口的铜像虽然得以重新塑造起来，但是对于二宫尊德的叙事却经历了很大的变化。1985年以来，常光撤先生通过对于自己高中就读学校的访谈，整理汇编成民俗学研究著作《学校的怪谈——口承文学的展开与诸相》一书。其中涉及到流行在学生当中的二宫尊德怪谈：

在晚上12点的时候，二宫金次郎像他手上拿的书就会翻页。每一晚，书的页数都会发生变化。他背上背的柴火的根数也是每天不一样。在晚上两点的时候，他就会在学校楼梯等地方走动。

这本书在1993年出版以后，很快被日本儿童绘本的编辑、电影导演相中，根据他提供的素材整理而成的7个校园怪谈，相继出版了不少的绘本、电影，并在当时的学生群体中流行开来。

二宫尊德怪谈为何会流行开来？其实，常光撤先生在书中也提到，怪谈在日本的传统社会一直都有流行。只不过随着日本社会的迅速变革，怪谈流行的文化空间发生了变化。原先流行在乡野民间的怪谈，如今进入青少年聚居的校园、成年人聚居的都市。虽然怪谈发生时间、空间发生了变化，但他所承载的类型和思想，依然是传统的。包括二宫尊德在内的诸多校园怪谈，实则是日本传统万物有灵观念在民众中的反映。

如今，日本社会的普遍富裕和对于教育的重视，使大家对于小学校中的二宫尊德塑像有了新的看法。2016年，日本一则网页新闻写道：

“如今一边走路一边玩手机的危险性已经得到人们的重视，而且我们也听到学校在向学生宣传‘不要这样子（边走路边玩手机）’。考虑到这样的时代潮流，我们也觉得比起一边走路一边读书的金次郎来说，坐像才是更为合适的。”另外他们也补充说：“即使是坐着形象，我们觉得金次郎的勤劳、勤奋的精神也是可以传达给学生们的。”

另外该团体还表示，虽然没有直接收到过类似于“让孩子们模仿金次郎的样子会有危险”这样的意见，但以前曾经有听到过类似的内容。记者调查发现，据新闻网站“每日.jp”12年1月的一份报道，滋贺县大津市的教育委员会就有收到过由监护人提出的“（像金次郎那样）一边走路一边看书是很危险的”的意见。

从铜像负重看书，到坐下看书，我们也可以看到在社会经济进入到一个相对平和的发生时期的今日，日本人相对更加放松、更加注重健康的精神状态。

参考文献：

1. 常光撤：《学校的怪谈——口承文学的展开与诸相》
2. <https://www.j-cast.com/2016/03/02260188.html?p=all>

